

地域ゼミ「西京銀行PBI」BNJプロジェクトでの 地域課題解決の実践と課題

— 社会人基礎力の結果から —

中嶋 克成¹ 野原 倫² 赤井 博信² 庄司 一也³
 (徳山大学)¹ (西京銀行地域連携部)² (帝京平成大学)³

1. はじめに

本学（徳山大学）は、「地域に貢献できる人材の育成」をめざして、地域とともに地域問題の解決に取り組むべく、研究体制の充実と教育の改革を進めているところである。その中核の一つとして、学生が主体となって地域の身近な問題を見つけ、その解決に向けて調査・分析から解決策の提示までを行う「地域ゼミ」が平成29年度から必修化されている[1]。

本稿はその「地域ゼミ」の1つの事例として、地元企業である「西京銀行」及び「バンダイナムコ・プロジェクト（以下BNJ PROJECT）」と連携して取り組んだ内容を報告する。本学の学生は3日間（合計5コマ）にわたって行われるこのインターンシップ（会場：西京銀行 本店2回、山口大学1回）に参加し、山口県内の魅力ある企業・観光地の調査、企画、発表等を行うこととなった。今回のインターンシップでは、西京銀行だけでなくバンダイナムコ・プロジェクト（BNJ PROJECT）¹⁾とも連携し、講師を派遣していただいた。本PBIでは、山口県をPRする旅行企画を作成し、地域を活性化する方法を講義や学生同士のディスカッション等を通して考える構成をとっている（図1）。

なお、本PBIでは作成された旅行企画は実際に商品化することを想定している。

（中嶋）



図1.講師からディスカッションの
進め方について講義

（1）西京銀行課題解決型インターンシップ開催の趣旨

2016年からの取り組みである「西京銀行課題解決型インターンシップ」（以下、「本PBI」）は、今年で第三回目の開催となるものである。

過去開催された第一回目、第二回目のPBI課題は、西京銀行にて2013年よりスタートした「若旅inやまぐち」²⁾の事業をさらにブラッシュアップする新たな企画案の作成であった。

第三回目となる本PBIでは、参加対象者が大学生に限定され、就職ツーリズムの特色を持つ「若旅inやまぐち」の企画に縛られることなく、学生の視野をさらに広げる形をとるため内容を変更した。新たな課題は「山口県の観光資源を活用した体験型観光企画の作成」

1) 「BNJ PROJECT」公式サイト

2) 「若旅inやまぐち」については引用文献[2]庄司一也ほか(2018)に詳しい。

と題し、対象者および旅行の目的等についても視野を広げ、学生の柔軟な発想をさらに求める内容とした。

講師に株式会社バンダイナムコエンターテインメント経営企画室経営企画部地域協働プロジェクト「BNJ PROJECT」チームメンバーである坂本純一氏を招聘し開催した。坂本氏が所属する「BNJ PROJECT」は、BANDAI NAMCO Entertainmentが日本各地（Japan）の経済活動とともに新たなエンターテインメントを創出し、日本を元気にしたいという想いからスタートしたプロジェクトである。そのため、この度は山口県をPRする旅行企画を作成し、地域活性化を学生とともに考察していく形をとった。

対して、主催者側となる西京銀行であるが、山口県周南市に本店を構える第二地方銀行として、地域密着型金融を目指し地域経済の活性化に積極的に貢献するために、まち・ひと・しごと創生総合戦略を踏まえた地方創生の取り組みを実施している。

また、近年の山口県の人口減少は、県内支店網がある当行にとって大きな懸念事項となるものである。これを改善し、将来的に山口県にて就労・定住してもらうためには若者に山口県に来ていただき山口県の魅力や優れた点をより多く知っていただくことは必須となる。このように、10年・20年先のことを考えた地方創生の事業を当行の担当部署である地域連携部では実施しているわけである。

本PBIについても、上述する当行の地方創生事業の一環の位置づけとなる。

概要としては、2018年6月9日（1日目）、7月14日（2日目）、7月21日（3日目）いずれも土曜日の3日間にて開催。講師は坂本氏が担当し、当行関係者（赤井・野原）は運営スタッフに従事した。参加者は、徳山大学16

名・山口大学4名・山口県立大学5名の計25名となり、主催者側が任意に4つのグループ分けをしての進行となった。

本PBIの全体的な流れは、①山口県の特徴を捉える（現状分析）②仮説を立てる（課題の選定）③企画のテーマを決める（課題解決方法）④企画内容をプレゼン形式で発表、という流れで実施した。

以下は実施内容の詳細である。

1日目は、場所を西京銀行の本店（周南市）にて1コマあたり90分の講義を2コマ開催した。ALの手法である、ブレインストーミング法やKJ法による情報共有と企画立案のための情報整理を行った。現状分析として山口県の良いところと悪いところを洗い出し、山口県の課題について仮説を立てた。

本PBIは事前の調査が前提になり、参加者は各自が事前に収集した山口県の観光地やイベント等の情報を持ち寄って参加することが求められた。そのため、次回までに各自が収集してくる情報等を各グループ内で役割分担し、講義に臨むことを確認した。

2日目は、場所を山口大学にて1コマあたり90分の講義を2コマ開催した。これまでに整理した情報をもとにテーマを決定した。それに伴い、旅行の申込者となるターゲットの選定やサービス概要の詳細とプロモーション方法を具体的に組み立てた。訪問する観光地を選定し、旅行のメインとなる体験型観光については、学生らしい斬新な視点で様々なアイデアが各班で飛び交った。

その後は、プレゼン資料の作成や発表準備、企画書の最終確認等を行い、一週間後となるプレゼン大会に挑む流れとなった。

3日目は、西京銀行本店（周南市）にて最終発表会としてグループごとにプレゼン発表会を実施。発表会では、各大学、山口県、旅

行会社等の関係者を招き、各班のプレゼンに対し講評を受ける機会を設けた。1班あたりの持ち時間は15分と定め、10分は学生側が発表をし、残り5分で来賓者からの講評と質疑応答の時間を設けた。

各班共に個性的な企画案が発表され、「歴史で若者呼び込むツアー」「思い出を作り山口の魅力に会おう」「大学生が楽しめる旅」「中国人観光客に向けた山口県スタンプラリー」と題し、決められた時間の中で学生達は作り上げてきた企画案を大いにアピールした。

全プログラム終了後には修了式を実施し、かつ全員に振り返りの発表を行わせた。

以上のように、参加者が主体的に調べ、考え、発表を行うという一連の取組みによって課題解決型AL (PBI) を実施することが出来た。

(西京銀行地域連携部)



図2.グループで山口県の地域課題を掘り起こしている様子
1日目 (西京銀行本店6月9日)



図3.ブレインストーミング・KJ法を援用し地域の強みを想起
1日目 (西京銀行本店6月9日)

(2) BNJ PROJECT

さて、「西京銀行課題解決型インターンシップ」の成果を報告する前に、講師を派遣していただいた「BNJ PROJECT」について少し詳細に触れておきたい。

「BNJ プロジェクト」は、日本全国へエンターテインメントを敷衍することを企図して誕生したバンダイナムコエンターテインメントと地方の自治体・企業を繋ぐ専門組織である。「エンターテインメントの視点からこれまでにないアプローチを地方に提案し連携することで、新たな市場の創出による地方活性化と、バンダイナムコエンターテインメントの認知拡大、ブランド向上を目指していく」2) プロジェクトである。そのため、この度は「BNJ プロジェクト」チームメンバーである坂本純一氏を招聘し本PBIを開催していくこととなった。

(中嶋)

2. 地域ゼミ全体の構造

本PBIは「地域ゼミ」全15回中の5回(6月9日2コマ、7月14日2コマ、7月21日1コマ)で実施された。

西京銀行PBI以外の学習も含めた日程は以下の通りである。

- ・4月～5月 PBLリテラシー教育 (徳山大学)
- ・6月9日 ガイダンス及び坂本講師による座学 (西京銀行PBI 1・2コマ目)
- ・6月13日～7月11日 PBIのリフレクション (徳山大学)
- ・7月14日 企画書作成 山口大学 (西京銀行PBI 3・4コマ目)
- ・7月19日 企画発表会準備 (徳山大学通常授業)
- ・7月21日 企画発表会 (西京銀行PBI 5コマ目)
- ・7月25日 企画発表のリフレクション (徳山大学)
- ・8月10日 地域ゼミ合同発表会

※下線が西京銀行課題解決型インターンシップの一環として実施されたもの

(1) YFL科目及びYFL_Tokuyama科目の一環としての西京銀行課題解決型インターンシップ

西京銀行課題解決型インターンシップ自体の流れについては前節に説明されているため、ここでは本インターンシップとYFL科目及びYFL_Tokuyama科目の一環としてどのように位置づけられているのかを論じておきたい。YFLとは地域で活躍するための6つの力(表1)を身につけ、地域の未来を担う人材「Yamaguchi Frontier Leader(やまぐち未来創生リーダー)」を育成する教育プログラムのことである。YFL育成プログラムに設定された科目を履修することで認定を受ける事ができる。「YFL_Tokuyama」は上記YFLが規定する6つの力を徳山大学が地域の実情に合わせ、4つの力(図4)に構成し直したものである。そのため「YFL_Tokuyama」では、「地域理解と愛着」、「EQ力をベースに主体的に学ぶ能力」、「地域課題対応能力」、「地域キャリアプランニング能力」4つの力を育成する。

先に述べたように、参加者は、徳山大学16名・山口大学4名・山口県立大学5名の計25名となった。参加者のうち、山口大学及び山口県立大学生については、本インターンシップをYFL科目「300番台・企業協働課題解決型インターンシップ」として各所属の大学に申請することが可能である。徳山大学では、「地域ゼミ」の一環として本PBIを受講した場合、「YFL_Tokuyama」の「地域課題対応力」+YFLの「200番台サービスマナー基礎」の科目となる。「地域ゼミ」としてではなく、個人的にYFL科目の1つとして参加した場合はYFL科目の「300番台・企業協働課題解決型インターンシップ」となる。これは各教員の事前事後及びインターンシップ以外の場面で指導の有無による。

表1.YFL育成プログラムの6つの力

①やまぐちスピリット
②グローバルマインド
③イノベーション創出力
④協働力
⑤課題発見・解決力
⑥挑戦・実践力



図4.YFL_Tokuyamaが育成する4つの力

(2) 西京銀行PBI以外の授業

上述のとおりインターンシップは3日間(計5コマ)であるが、1回目のPBIまでに徳山大学でPBLリテラシーを意識した授業を実施している。初回の授業からJC(青年会議所)のメンバーの協力のもとランチ茶話会(図5)4月25日に本学食堂で実施し、リーダーシップや課題発見の方法についてのディスカッションやアンケートを実施した。その活動から抽出された各学生の課題について5月16日にJCの方2名にゲストティーチャーとしてお越しいただき、グループワーク、ディスカッション等によりなどを通して学習し、西京銀行のインターンシップに向けた準備を行った。



図5. ランチ茶話会の様子（徳山大学食堂）

また、PBI開始後は、各研修の間には教室授業を挟み、インターンシップで学んだことを適宜リフレクションし、次回のインターンシップに向けての調査・準備も行った。また、インターンシップ各回の様子を筆者が動画撮影・編集し、動画共有サイトにアップロードした。アップロードした動画は「限定公開」にしておき無関係のものが検索できないように設定している。参加学生にはアドレスを伝え、リフレクションや課題解決法を考える際にもいつでも見直すことができるように配慮した。

インターンシップ後、学生たちは西京銀行課題解決型インターンシップおよび本学習で学んだことをまとめ、地域ゼミ合同発表会（図6）で発表している。

以上（1）、（2）はあくまで地域ゼミの授業時間内での学習であったが、旅行企画書の作成や地域ゼミ合同発表会の準備は、授業内の学習だけで終わることはできない。学生たちの授業外学修を促進させたツールとして本学LMS「web class」やSNSグループチャット等を使用し、資料の作成を進めていた。

（中嶋）

3. 本PBIの成果と課題（西京銀行地域連携部）

前述のとおり、2016年より始まり今年で3



図6. 地域ゼミ合同発表会の様子

回目となる「西京銀行課題解決型インターンシップ（PBI）」は、徳山大学学生16名を含む計25名で開催された。

繰り返しとなるが、本PBIの目的としては、「山口県の観光資源を活用した体験型観光企画の作成」を通して山口県の魅力や課題を学習者自らが発見すること。さらには、それらの発見に至るまでの情報収集・プレゼン能力・企画力の強化が挙げられる。このような企画の中で、主催者側として注目したのは、学習者たちのグループワークから得た学びと成長である。このことは、学生にとって他では代用できない「経験」となったと推測する。

また以下については、本PBIを受けることにより、学生たちに成長を期待した強化ポイント3点となる。

①物事の見方・捉える力の強化

人によって物事の見方は違い、その違いによって新しい発想やアイデアは生まれる。本PBIはそのようなことが実感できる学びの場となったであろうと史料する。

学生の多くは、今までの学生生活を、同じ学歴・価値観・趣味・思考等を持つ者同士が近い存在となり、友人グループを作り日々過ごしているだろう。しかし、今回のグループ分けについては、主催者側が任意に振り分けをしたため、大学や学年・学部も異なる者同

士で学びを進める形となった。

そのため、グループワークをこなす中で、各参加者がそれぞれ主体的に調べ・考えることにより、自身では考えつかなかった発想や企画に対する問題点またはその解決策を様々な角度から見出せたことは大きな成果である。

物事を平面的に見るのではなく、さまざまな方向から立体的に見る経験ができ、学生自身も「多くの意見が集まると様々な新しい視点が生まれることに気づかされた」とPBI後の感想に残している。

自分の考え方・物事の捉え方について、「本当にそうなのか？」という疑問を持つことは、自身の固定概念を打ち破り新たな発想を見出すことができ、また意見の違う他者の意見を受け入れる意味での柔軟性を身につけられる。

②企画力の強化

本PBIでは、山口県の現状分析⇒仮説⇒テーマ設定とシンプルに順序良く頭を整理し、現状の課題を解決する企画書を作成していくものであった。

各グループには、山口県の現状の課題について仮説をそれぞれ設定させた。例えば、現状分析として「山口県には訪れるべき魅力的な観光地があるにもかかわらず人が集まらない」という課題に対し「山口県のPR不足」という仮説を立てる。そして、課題を解決するテーマとして若者の情報発信を活かした「映えを探そうツアー」を展開。

学生ならではの視点から、山口県の課題を分析し課題を解決する手段と方法をテーマ設定、流行を取り入れた効果の表れやすい解決策を提示し、映えを狙える県内の観光地選定を組み合わせた好事例と言える。

各グループ共に、山口県の現状分析から仮説の設定まではスムーズに行われていたが、そこからのテーマ（課題解決）を絞り込む過

程において苦労が見られた。ここでは「まとめる力」が求められ、収集してきた複数の情報のポイントを押さえ、いかにシンプルな内容を短時間でまとめられるかは企画のカギとなった。最終的に各グループ共に個性的な企画にたどり着くことができ、企画力とまとめる力の強化が図られたと思路。

③プレゼン能力の強化

企画作成のプロフェッショナルである講師より、「プレゼン資料は極力文字数を少なく、伝えたいことは文字ではなく言葉で表現するように」との指導があった。

このため、学生は「伝える力」の強化がより求められる形となった。自分の頭の中の考えを、簡潔にまとめて他人に伝えること、それを大勢の人前で発表する機会を設けたことは学生にとって非常に良い経験になったであろう。

実際に最終日に行った発表会において、情報を簡潔に整理し、分かり易く人に伝える様には成長が見られた。また、大学関係者・山口県・旅行会社等の来賓者より、その場で答えを出すには難しい質問等も飛び出し、学生が戸惑う場面も見受けられましたが、想定される質問を事前に考えておくなどの、事前準備の大切さも学べる機会となった。



上述の①から③のいずれの能力に関しても、

社会人としては必須の能力となる。社会人と学生の大きな違いは、価値観の違うもの同士が一つとなり、同じ目的・目標に向かって共同で進むことである。そのような中、①から③の能力の強化は今後の就職活動および社会人生活の中で必ずや役に立つこととなるだろう。

また、各グループとも、作業の中で各々が自分のポジションというものを形成していく様も見受けられ大変興味深かった。リーダーシップを発揮し自身の意見もはっきり発言でき、グループワークを牽引した者もいれば、聞き役に徹し書記をするもの、パソコンが得意なことを活かし資料作りに注力する者、あるいは流れに身を任せ、主体的に行動できない者も存在した。原因としては、前述の価値観の違いの話にも通じるものとなるが、個々の今までの経験の違いにより理解力やコミュニケーション能力に差異が出てきたものと考えられる。

積極的に参加できない学生においては、講師や運営スタッフ、学校側にてフォローを行うことは必須であるのはもちろんであるが、グループメンバー間でお互いを高めあうことが重要であると感じた。アクティブラーナーとなっている学生が、そうではない学生に対して積極的に参加できるように促す。逆に、そのような学生から刺激を受け、回を重ねるごとに、徐々に自分の意見を積極的に発することが出来るようになる学生も存在した。正に「学びあい」の経験であったと思う。

学習者が主体的に調べ、考え、発表を行うという一連の取組みによる課題解決型AL(PBI)を複数の大学で先行的に実施できたことは、大変画期的であった。他では代用できないこの度の経験において、参加者それぞれに得るものがあり、自己成長につながる経験

となったと思う。主催者として、この度の企画を通し学生たちの成長を見守れたことは、大変有意義であったが、併せて、各学生自身が山口県の魅力を再発見し、さらには定住・就職を通じて山口県人として地域に貢献できる人材に育つことは、山口県に拠点を構える当行の期待するところである。

(野原)

4. 「社会人基礎力」から見た成果

今回報告した西京銀行課題解決型インターンシップに限らず、「地域ゼミ」では学生自らが地域の課題を探し出し、その解決のために考え、学び、調査・分析を進めていく。その一連のプロセスにおいて獲得する「課題解決に向けた方法論」こそが、社会に出て役に立つ真の力に繋がると期待されている。そこで、経済産業省の「社会人基礎力」(図8)チェックシートを用いて本PBIの事前事後で学生の力がどのように変容したのかを調査した。なお、社会人基礎力チェックシートは「社会に貢献できる人材について」、「自分の強み・課題」を自由記述し、「前に踏み出す力」(3項目)、「考え抜く力」(3項目)、「チームで働く力」(6項目)について合計12項目を5件法(1優れている、2やや優れている、3標準的、4やや劣る、5劣る)で回答する構造をとっているが、本研究では主として5件法の項目を抽出して分析した。



図8. 社会人基礎力

まず、学生ごとに上記社会人基礎力12項目の得点を算出した。各項目の解答値（1点から5点）の平均点を算出した。ただし、社会人基礎力は全項目が逆転項目であるため、6から素点を減算したものをを用いた。

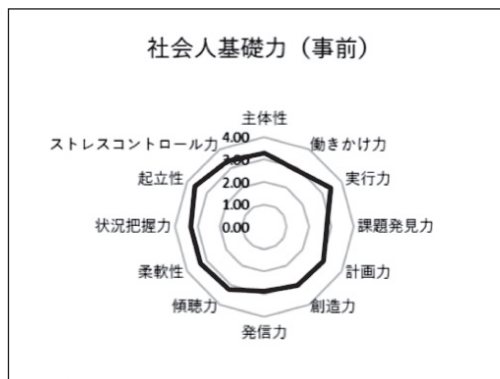
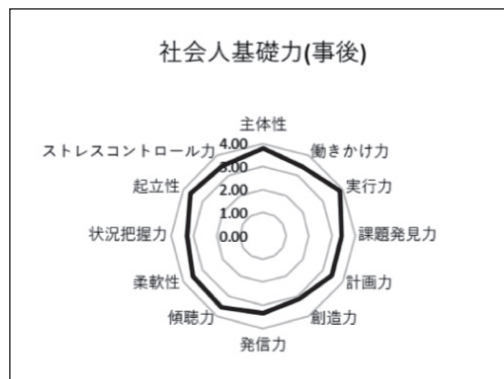
対象は、徳山大学から本PBIに参加した大学生計16名(男性11名,女性5名)である。

計測した社会人基礎力の結果は以下の通りである(図9)。

社会人基礎力の「状況把握力」は同じ数値であるが、その他の項目については「事後」の方が「事前」を上回っている。したがって、

西京銀行課題解決型インターンシップが「社会人基礎力」について良好な教育効果を持つ可能性が推測される。全項目中のPBIの前後で最も向上したのは「課題発見力」であり、「2.79」(事前)が「3.43」と向上している。このことは本PBIが企図した「課題対応力」が育成された可能性を示している。

しかしながら、「状況把握力」は「3.29」(事前)から「3.29」(事後)と変化がなかった。「状況把握力」は「自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する」ことである。これは次年度以降の課題である。



	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力
事前	3.29	2.93	3.43	2.79	3.07	3.00
事後	3.79	3.43	3.86	3.43	3.43	3.14

	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	起立性	ストレスコントロール力
事前	2.86	3.21	3.29	3.29	3.57	3.36
事後	3.36	3.57	3.50	3.29	3.64	3.50

図9. 社会人基礎力の結果 (事前・事後)

5. おわりに

本稿では西京銀行PBIとして本年度より新しくはじまった「BNJ PROJECT」の実践状況と課題を報告した。主催者が感じる成果として、「①物事の見方・捉える力の強化」、「②企画力の強化」、「③プレゼン能力の強化」の3点があげられた。これは本PBIの意図した通りの成果である。このことは、「社会人基礎力」チェックシートを用いた分析においても同様の結果が示されている。

しかしながら、今後の課題として以下の3点があげられる。

まず、第一に「社会人基礎力」のうち向上しなかった「状況把握力」の育成である。本学の教育の特色である「ALによる学びの転換」をさらに全学的に進めていくことが必要となるであろう。

第二に、「課題発見力」である。確かに本PBIを通して最も向上したのがこの項目ではあるが、「事前」のデータの中で最も低かったのも当該項目である。また、本調査では母数が少なく、個人の資質による可能性を排除できない。本PBIが本当に効果的であったかについては、今後も調査を続けていく必要がある。

第三に「社会人基礎力」の調査を行ったのが、本学学生のみだったという点である。本学学生は、PBIの事前事後に大学でそのリフレクションや資料作りなどを行っている。したがって、本学学生の「社会人基礎力」が向上したのがPBIによるのかその前後の大学での指導によるものかは判然としない。今後は、PBIのみ

参加の学生への調査も行い補完すべきである。

さて、先にも述べた通り、本PBIでは活企画された旅行企画について、実際に商品化するところまで想定している。しかしながら、本稿を寄稿する時点ではまだ商品化には至っておらず、商品化後に企画の価値や学生の学びについてリフレクションする必要がある。西京銀行のPBI担当者が感じた学生の成長をもとに教育効果を考察した。しかし、より重要なのは学生自身が自分の学びを実感しているかどうかであろう。今後は他の尺度も用いて学生の主観的学習効果も評価していきたい。

謝 辞

「地域ゼミ」内でのPBIにおいて講師を務めていただいた坂本先生、本学学生にPBIという学びの機会を与えていただいた西京銀行様に感謝申し上げます。また、平成30年度地域ゼミ（中嶋）の学生には本稿執筆にあたってご協力いただきました。感謝いたします。

引用・参考文献

[1] 庄司一也, 寺田篤史(2017):アクティブ・ラーニングは徳山大学をどう変えたか? .平成29年度大学教育再生加速プログラムテーマI「アクティブ・ラーニング」シンポジウム発表抄録集, pp.20-28.

[2] 庄司一也・赤井博信・野原倫・岡崎将吾・弘中明彦(2018):地域連携型PBI「西京銀行 課題解決型インターンシップ(若旅inやまぐち)の実践～地域ゼミ(地域課題によるPBL体験)の一事例として～.徳山大学総合研究所紀要,no40,pp.47-56.